

# 歴史的都市に隣接する地域の街並み実態調査に関する研究 —郡上八幡小野地区を対象として—

3606F041-9 松崎直紀

Naoki Matsuzaki

歴史的な街並み保存活動等を中心に積極的なまちづくり活動をしてきた中心市街地であるが、現在その中心部に住んでいた人々がより良好な住環境を求めて周縁部に移動している。その結果、中心部では空洞化し、また周縁部でも明確な街のイメージを共有できずその特徴をはっきりと示せていない。本研究では中心部に隣接する小野地区を対象とし、地域内の建物の特徴を把握した上で隣接している地区の現状を整理する。建物を構成する要素の組み合わせによるタイプ分類を行い、それら分類した建物の建設された年代を整理し、地図上にまとめた。また、分類した建物タイプが地域内における通りの景とどのような特徴や関係があるのかを整理した。

**Key Words:** 建物タイプ, 建築要素, 中心市街地, 郡上八幡, 周縁部

## 1. はじめに

### 1.1 背景

現在、中心市街地において人口の減少や都市機能の空洞化が全国各地で進んでいる。この要因として、モータリゼーションの発展による居住者・大型ショッピングセンターの郊外流出や行政の郊外開発推進、ライフスタイルの変化、中心市街地店舗の後継者不足などが挙げられる。空き店舗の増加やシャッター通りとなった商店街も多く見受けられ、各地方都市では現在、様々な対策を講じている。

本研究の対象地である郡上八幡においても、中心部から郊外部への人口移動が急速に高まっている。これまで、八幡中心部では様々なまちづくり活動団体が街の新たな魅力発見や昔ながらの街並みや歴史の保存に向けて活動をしてきた。その活動のきっかけはこの街を語る上で欠かせない河川や水路といった水環境施設を見直すことであった。八幡町（現郡上市）では『水辺空間調査』（2005 年）や『八幡町景観形成基本計画策定調査報告書』（2000 年）といった調査を行い、まちづくり調査が行政主導のもと行われてきた。その結果、住民は自分たちの街に目を向けるようになり、同様に整備された水環境施設によって観光客の心を捉え、昔ながらの生活感を物語る街の良好なイメージにも貢献している。

それに対して、隣接する地区（周縁部）に注目すると、地域内を流れる水路であったり、井戸や洗い場といったものも見受けられたりと中心部との共通点もある一方で、これまでの農村地帯であった環境に全国どこにでも見られるような類の建物が建ち並び始めている。新たな土地で生活を始める住民は

元々は中心部に住んでいた者も多くおり、市街地住民が郊外部へとより良い居住環境を求めて移動してきている現状がある。これまでの街の発展を考えれば周縁部と中心部との関係は切り離せないはずである。また、詳しくその地域に目を向ければ、周縁部にも存在する景観的な特徴を活かしたまちづくりの可能性はあるはずである。本研究で対象とするのはそのような周縁部とする。

### 1.2 目的

伝統的な建物を保存しながら積極的なまちづくり活動を行ってきている八幡中心部に対しては今後も活動は継続的に行われていくものと考えられる。しかしながら隣接する地区においては現在伝統的な建物と新しいタイプの建物が混在して増えており、その建築様式も複雑化している。そのような地区での目指すべき方向性を見出すことが急務であり、複雑に構成されていると考えられる建築要素の実態を理解し、その要素に対する評価を積み重ねていく必要がある。

そこで本研究では、このような様々なタイプの建物が混在して建てられている地区を対象とし、現在の街並みを構成している複雑化した建築要素を一度丁寧に見直し、建築要素の組み合わせによってどのような建物が存在しているのか、その特徴を明らかにする。歴史的な都市である郡上八幡に隣接する小野地区住宅街に混在する建物のタイプを分類し、それらが建設年代やエリア（地形的な制限）によってどのように関係しているかを明らかにすることを本研究の目的とする。

### 1.3 研究の位置づけ

郊外住宅地の将来像のあり方を扱った既存研究としては、吉田ら<sup>1)</sup>(2007)は開発から30年経過した千葉県の郊外の住宅地において、入居時期や世帯主の年齢などの属性を整理したうえで、当該住宅地への転入の候補となる若年・中年層の特徴を把握し今後の年齢階層の混合を促す施策のためのヒントを示している。また、溝渕ら<sup>2)</sup>(2007)は山梨の地方都市中心部の郊外住宅地における建築ガイドライン策定に向けて対象地域の建築物の構成要素の現状を定量的に把握し、建築様式をタイプ分類した。分類した建物タイプを住民評価により住民が納得できる建築物の要素や対象地に合う・合わない建築物の傾向を抽出している。そのほかにも都心部における郊外部の住宅地の外観調査や居住者との関わりを把握する研究が見られてきているものの、地方都市において中心部ではなく周縁部そのものの実態を把握しようとする研究はまだ少ないといえる。

### 1.4 研究の方法

本研究では隣接部の建物や街全域に広がる水路や通り景の実態調査を通じて現況をまず把握し、統計的なデータ処理を行った後に分析し考察する。具体的には建物の形態・外壁の明度・素材などの建築要素に注目し一棟一棟の特徴を細かく見ていき、クラスター分析や数量化Ⅲ類によって建物のタイプ分類を行い、分類した建物タイプの特徴に対して対象地区の地形や水路との関係性を考察する。

## 2. 小野地区の地域特性

### 2.1 小野地区の沿革

岐阜県郡上市八幡町(郡上八幡)では市街地東部の山岳部は石灰岩層で形成されており、ここから生まれる水と共に生活に根ざした多様な水環境によって『水の街・郡上八幡』としても広く知られている。

中心部では地域ごとの街並み保存会や用水路の掃除当番などの取り決めが様々な住民の協力のもと定められ、現在もその活動は続いている。中心部が街並み保存といった活動を通じて昔からの街の形態を維持している中で、隣接する小野地区に目を向けると幹線道路に沿う形で住宅地が形成されている。当

地区では昭和40年代に行われた土地区画整理事業に伴ってそれまでの田園地帯から段階的に宅地化が推進されてきた地域である。近年では文化的な建物が建ち並ぶ住宅地となり、農村的色彩はかなり薄くなっている。



図 1 小野地区

### 2.2 土地区画整理事業の概要

小野地区は、八幡町市街地の北東部に位置する面積約40ヘクタールの丘陵状段地で日照・排水等、住宅地として立地条件に恵まれている。事業施行前において、当時の事業に関する資料<sup>9)</sup>によれば『住宅の新築も年々建ち並びはじめたものの、農耕地帯のため公衆用道路、給排水施設等、市街地形成上必要な施設が不備であり、不良市街地の様相を呈しつつあり、加えてこの地区が八幡統合中学校校舎建設の最適地として候補地となり、ここに土地区画整理を施行して公共施設の整備改善を図り、道路および用排水路を完備した適切かつ健全なる宅地造成を推進するため、地元住民ならびに町当局の協力を得てこの事業を完遂することを目的とする』と述べられている。

表 1 事業概要

組合設立認可	昭和46年3月31日
設立時組合員数	296名
工期	着工:昭和46年3月31日 竣功:昭和55年6月30日
総事業費	3億8481万6千円

小野地区は住宅地として土地の活用を図るべく、農耕地を転換利用し、おおむね地区内での計画戸数を約600~700戸、計画人口を約2,300人と想定して、地形に順応した公共施設の配置を考慮して設計を進めた。すなわち、県道高山~八幡線(当時)を

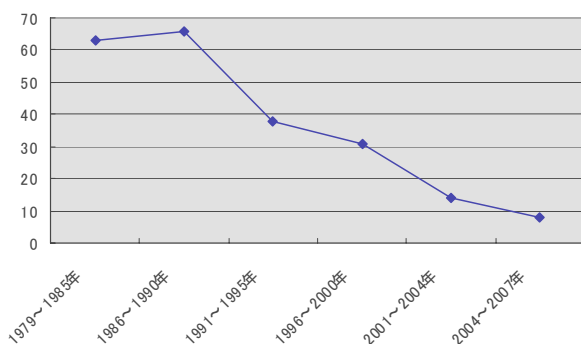
基本として、土工量の増大を極力避けるべく、等高線に沿って各区街路線を考慮している。

公園敷地は地区内に新たに4箇所設けることとしている他、地区内の排水は道路側溝によって処理することとした設計方針となった。

## 2.3 小野地区の現状

### (1) 建物立地の現状

図1に30年ほど前から現在にかけての建物の増加数を示す。1980～90年の10年間で著しく建物が増えており、現在は増加しているものの比較的落ちついてきている。



既存建物数	1979年まで	371 (軒)
増えた軒数	1979～1985年	63
	1986～1990年	66
	1991～1995年	38
	1996～2000年	31
	2001～2004年	14
	2004～2007年	8

図2 年代別建物増加数の変遷

### (2) 地形的特徴

2.3 事業設計方針でも述べたように、小野地区における区画整理事業は等高線に沿って各区街路線を考慮しており地域の高低差は街路や壁面に変化を与えている。ここでは地域内の高低地の様子を明らかにするため、地形図に記載されている等高線を基に地区の傾斜の様子を把握した。その結果を図3に示す。

図3より小野地区は南部を流れる吉田川沿いに発達した河岸段丘上にある集落であり、東西方向への移動の際の傾斜は緩やかであるが、南北方向の傾斜は所によってはやや急であり、その傾斜が地区内の建物の立地形態にも大きく影響を及ぼしている。3丁目や7丁目など地区によっては盛土上に立地しているものも多くあり、周囲の擁壁が建物の一部として構成しているものも少なくない。地域内の特徴と

街並みを考える上でこの勾配による擁壁は無視できず、傾斜との関係性も考慮する必要がある。

## 3. 建物実態調査

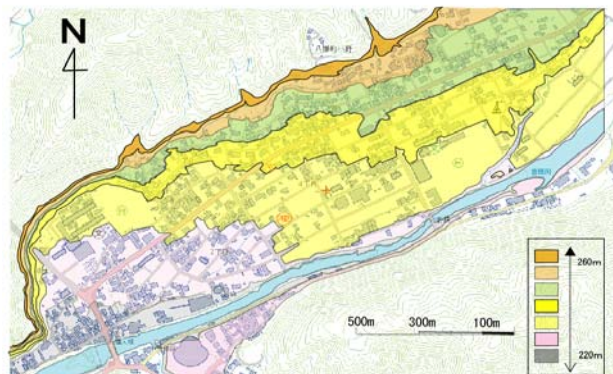


図3 小野地区の地形

### 3.1 調査概要

#### (1) 調査方法

現地調査によって、対象とする建物591軒の写真撮影を行い、同時に調査シートに従って目視による建物外観に関する実態調査を行う。調査シートは対象地区内において事前にナンバリングされた建物に対して使用し、各チェック項目に従って記入した上で以下の分析を行うこととする。

#### 1) 構成要素の把握とタイプ分類

建物が多様化している理由として、個々の建物の外観に用いられている部分的要素（以下「構成要素」と呼ぶ）の多様化が考えられる。構成要素の特徴や傾向を知ることは今後の対象地区におけるまちづくり関連事業において重要な事であると考えられるので、構成要素を抽出し、その実態を定量的に把握する。構成要素をカテゴリーとして、数量化Ⅲ類やクラスター分析を行い、類似する構成要素の組み合わせによってタイプ分類を行う。

#### 2) 建物タイプの地域分布と歴史的背景との関連性

1970年代の住宅地図<sup>3)</sup>から約5年おきに対象地区内における建物タイプの変遷を見ていき、その分布の特徴を把握する。

#### (2) 調査対象地と調査期間

本研究で調査対象としたのは小野地区全域（1丁目～8丁目）における住居とした。調査を平成19年9月1日～3日に実施した。

### 3.2 建物外観の基本的特徴

はじめに、外観の基本的な特徴として「間口」「奥行き」「建物形状」について整理した。「間口」「奥行き」に関しては「5m～15m」の間口がほぼ7割強を占め、奥行きにいたっては8割を超えることがわかり、この規模の建物が小野地区の代表的な建物の規模ということになる。間口と奥行きの関係で言えば「10m前後×10m以下（間口×奥行き）」のものが最も多かった。建物形状については「1階>2階（1階の床面積が2階よりも大きい）」・「箱型（1階と2階部分が同じ床面積）」・「平屋」・「ガレージ」という分類をした。それぞれの割合を右の図5～7に示す。

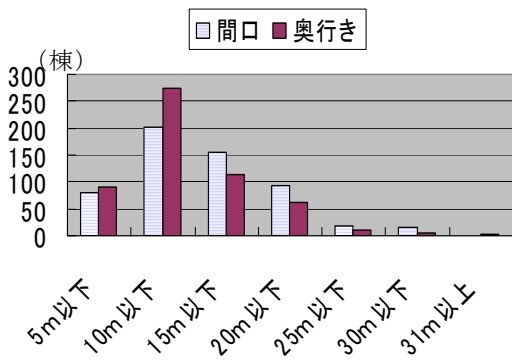


図5 間口と奥行きの大きさ (総数)



1階より2階の床面積が小さい (1階>2階)

平屋



箱型 (1階と2階がほぼ同じ床面積)

ガレージ

図6 建物外観の基本的形状

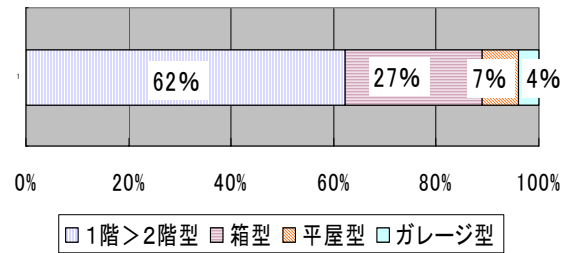


図7 建物外観の割合の割合

### 4.3 構成要素の現状把握

#### (1) 構成要素の抽出

調査した建物の詳細を整理する。建物を構成する要素の基本となる外壁や屋根等を「基本的構成要素」とし、セットバックした空間の用途や塀形態等を「付属的構成要素」として、その構成要素を表2のように抽出した。

表2 建築物の構成要素

構成要素	各構成要素の詳細分類	
基本的構成要素	階数	『1階建て』『2階建て』『3階建て以上』
	外壁明度	『暗い』『普通』『明るい』
	外壁素材	『漆喰』『板張り』『非木造』
	屋根形状	『切妻』『寄棟』『入母屋』『陸屋根』『その他』
	屋根素材	『瓦』『トタン』『その他』
付属的構成要素	窓の大きさ	『大』『中』『小』『なし』
	塀の素材	『コンクリート』『ブロック』『石』『生垣』『フェンス』『その他』『塀なし』
	塀の高さ	『低』『中』『高』
	出入り戸	『木製』『アルミ』『シャッター』『その他』
	樹木の用途	『観賞用』『防犯用』『その他』
	セットバック規模	『大』『中』『小』『なし』
セットバック用途	『庭』『駐車場』『商品陳列』『展示』	

#### (2) 構成要素の把握

##### 1) 基本的構成要素

各構成要素の割合を以下表2に示す。

##### a) 外壁

外壁の構成要素は素材と明度を取り上げた。素材は「漆喰・板張り・非木造」で分類し、漆喰が最も多く、非木造で最も多かったのはサイディングでその次にモルタルであった。明度では明るい茶系の色と伝統的な印象を持つ家屋等で使われるような落ち着いた色が大半を占め、その割合は約半分ずつである。中には白を貴重とした欧米風の建物も混在していた。

b) 屋根

屋根は形状と素材に注目した。素材は「瓦・トタン・その他」に、形状は勾配のあるものなかから「切妻・寄棟・入母屋・その他の形状」に分類した。屋根材の多くは瓦が多く、次にトタンやスレートが多かった。また、2階部分は瓦でありながら1階屋根の部分にはトタンになっているところが多く存在しこれらはあえて瓦でもトタンでもない壁の素材との関係としては、寄棟形状の建物のほとんどは1階と2階部分が一体(箱型)となっているものであり、外壁の素材は非木造(サイディング等)が多くあった。陸屋根は「勾配なし」とみなし、全体での割合としては11.5%であった。このことからこの地区における建物の約8割強が何かしらの勾配のある屋根形状をしているということがわかる。

2) 付属的構成要素

付属的構成要素から得られた特徴で主なものを以下にまとめる。

a) 窓の大きさ

建物正面に向かって外壁に対して窓の開める割合が半分以上を占める場合は「大」、半分が「中」、それ以下が「小」として分類した。その結果、「中」が60%を占め、その次に「小」・「大」が20%前後であった。

b) 塀の素材

塀の素材を「コンクリート」「ブロック」「石積み」「樹木」「生垣」「フェンス」「その他」「塀なし」と分類した。塀がないものが最も多く46%であった。逆に考えれば塀のある建物は54%あり、過半数を少し超えるくらいであり、印象としては半々であった。塀を持つもので最も占める割合の多い要素は「生垣」であり22%であった。庭の緑と関連して、あるいは隣接する民家で共通の素材の塀を用い

るところも多く見かけることができ、それらが街並みに緑が多く存在することを表しているといえる。

c) セットバック用途

セットバックはここでは家の敷地内における建物以外のスペースのことを言い、分類する尺度として「セットバック大」(車が建物に対して垂直方向に止める事が出来るくらいの広さ)、「セットバック中」(車が建物に対して並列方向に止める)、「セットバック小」(小スペース)、「セットバックなし」と定めた。調査結果によると「大」が最も多く

40%を占めていた。関連してセットバックの用途について整理すると「庭」と「駐車場」とがほぼ同数で半分ずつ占めていた。このことは当地区では広い用地の使われ方が庭か駐車場として使用されており、建物を撮影した写真の印象もそれぞれでずいぶんと違うことから今後の街並みを形成して行く上で塀の素材やセットバックの用途といった要素は大いに当地区と関係付けられる要素を担っているといえる。

表2 各構成要素の割合

基本的構成要素					
階数	軒数	割合	外壁明度	軒数	割合
1階建て	61	10.5%	暗い	234	43.1%
2階建て	479	82.3%	明るい	250	46.0%
3階建て以上	42	7.0%	白い	59	11.0%
合計	582	100%	合計	543	100%
外壁素材	軒数	割合	屋根素材	軒数	割合
漆喰	275	46.9%	瓦	365	65.4%
板張り	90	15.4%	トタン	32	5.7%
非木造	221	37.7%	その他	161	28.9%
合計	586	100%	合計	558	100%
屋根形状	軒数	割合	高さ	軒数	割合
切妻	370	67.0%	かなり高い	10	2.0%
寄棟	54	9.8%	やや高い	60	11.7%
入母屋	72	13.0%	ほぼ同じ	407	79.6%
その他	56	10.1%	低い	34	6.7%
合計	552	100%	合計	511	100%
付属的構成要素					
窓の比率	軒数	割合	出入り戸	軒数	割合
大	92	16.0%	木製	79	14.0%
中	346	60.1%	アルミ	345	61.2%
小	125	21.7%	シャッター	20	3.5%
なし	9	1.6%	その他	22	3.9%
不明	4	0.7%	不明	98	17.4%
合計	576	100%	合計	564	100%
樹木の用	軒数	割合	庭の面積	軒数	割合
観賞用	293	61%	3台分以上	206	41%
防犯用	114	24%	2台分	113	22%
その他	22	5%	1台分	92	18%
なし	50	10%	1台未満	73	15%
合計	479	100%	なし	20	4%
			合計	504	100%
セットバック	軒数	割合	SB用途	軒数	割合
なし	66	11.4%	庭・鉢植え	264	41%
小	159	27.6%	商品展示	9	1%
中	116	20.1%	駐車(輪)場	265	41%
大	236	40.9%	その他	32	5%
合計	577	100%	なし・その他	74	12%
			合計	644	100%
塀全体	軒数	割合	塀の素材	軒数	割合
塀あり※	316	53.2%	コンクリート	47	7.9%
塀なし	278	46.8%	ブロック	39	6.6%
合計	594	100%	石積み	15	2.5%
			樹木	13	2.2%
			生垣	133	22.4%
			フェンス	62	10.4%
			その他	7	1.2%
			塀なし	278	46.8%
			合計	594	100%

※一部重複

5. 建物タイプ分類

5.1 クロス集計による分類

No.	屋根素材	No.	屋根形状	No.	外壁	小計	合計	略称
A	瓦	a	切妻	3	漆喰	104	187	Aa3
				2	板張り	29		Aa2
				1	非木造	54		Aa1
		b	寄棟	3	漆喰	16		Ab3
				2	板張り	2		Ab2
				1	非木造	7		Ab1
	c	入母屋	3	漆喰	28	Ac3		
			2	板張り	8	Ac2		
			1	非木造	10	Ac1		
	d	その他	3	漆喰	1	Ad3		
			2	板張り	2	Ad2		
			1	非木造	0	Ad1		
B	混合 (トタン+瓦)	a	切妻	3	漆喰	35	95	Ba3
				2	板張り	13		Ba2
				3	非木造	47		Ba1
		b	寄棟	3	漆喰	7		Bb3
				2	板張り	0		Bb2
				1	非木造	8		Bb1
	c	入母屋	3	漆喰	6	Bc3		
			2	板張り	2	Bc2		
			1	非木造	2	Bc1		
	d	その他	3	漆喰	6	Bd3		
			2	板張り	0	Bd2		
			1	非木造	0	Bd1		
C	トタン・スレート	a	切妻	3	漆喰	22	61	Ca3
				2	板張り	16		Ca2
				1	非木造	23		Ca1
		b	寄棟	3	漆喰	6		Cb3
				2	板張り	2		Cb2
				1	非木造	10		Cb1
	c	入母屋	3	漆喰	2	Cc3		
			2	板張り	3	Cc2		
			1	非木造	2	Cc1		
	d	その他	3	漆喰	2	Cd3		
			2	板張り	3	Cd2		
			1	非木造	9	Cd1		

図 7 屋根素材・屋根形状・外壁の組み合わせ

建物のタイプ分類を行うにあたり第 4 章での調査結果を基に、まず基本構成要素のクロス集計を行いそれぞれのタイプの略称を定める（例：瓦屋根一切妻—漆喰外壁であったら【Aa3】など）。図 5-1 には屋根素材『瓦』『混合その他』『トタン』と屋根形状『切妻』『寄棟』『入母屋』『その他』との組み合わせを表している。屋根素材(A~C)・屋根形状(a~d)・外壁(3~1)の組み合わせ 36 通りのカテゴリに分けそれぞれに組み合わせの略称を付けた。細かく見てみると瓦屋根の場合はその形状は切妻が 4 分の 1 の割合を占めており、その中でも漆喰による外壁（略称 A a 3）が多くを占めている。瓦屋根以外の屋根素材については屋根形状に陸屋根を含む『その他』の屋根形状との組み合わせが若干多くなっている。また、混合屋根とは 2 階の屋根素材は瓦であるものの、1 階部分にトタンやその他の素材との組み合わせによって構成されるものを指しており、瓦のみの屋根素材のものよりも屋根形状のバリエーションは豊富になってきているといえる。

5.2 クラスタ分析による解析結果

第 4 章で整理した建物の基本構成要素と建物形状の分類とを組み合わせ、クラスタ分析によって分類を行った（表 3）。分類した結果から各タイプの特

徴を整理する。また、除外の対象となった建物は主に商店や事務所となっており、今回の建物タイプ分類においてはまず住宅に対して行うこととし、得られたクラスタ No. の特徴について以下述べる。

表 3 クラスタ分析結果

クラスタ No.	件数	
1	143	31%
2	95	22%
3	86	18%
4	73	14%
5	66	14%
合計	463	100%
除外	130	

タイプ 4（時代適応型 仮）

屋根形状は切妻で、屋根材はトタンと瓦の組み合わせで構成されているものが多く、建物形状や外壁もバラエティに富んでいる。

タイプ 1（伝統的旧来型 仮）

瓦屋根に切妻、外壁は漆喰の要素がほとんどであり伝統的に昔ながらの工法により構成されている。

タイプ 2（伝統的継承型 仮）

瓦屋根に切妻であり外壁は板張りがほとんどでそれ以外にも一部改装されて非木造のものにもなっている。建物形状は箱型の割合も多く占め和の雰囲気を醸し出している。

タイプ 5（現代的大衆型 仮）

タイプ 2 と対極にある現代風のもの。ハウスメーカーによる建物もこのタイプに属されるものが多い。

タイプ 3（現代の継承型 仮）

伝統的でもありながら現代的な雰囲気も併せ持っているもので、屋根形状は切妻ではないものの瓦屋根と漆喰による外壁で構成されている。

表 4 タイプ別構成要素の割合

	主な構成要素	屋根形状	屋根素材	外壁	建物形状
I	タイプ1	切妻:99%	瓦:99%	漆喰:99%	1階>2階型: 85%
II	タイプ2	切妻:99%	瓦:99%	板張り: 66% 非木造:	1階>2階型: 78% 箱型:16%
III	タイプ3	寄棟:30% 入母屋: 64%	瓦:99%	漆喰:61% 板張り: 18%	1階>2階型: 95%
IV	タイプ4	切妻:99%	トタン:38% 瓦+トタン: 62%	漆喰:38% 板張り: 18%	1階>2階型: 58% 箱型:33%
V	タイプ5	寄棟:33% 入母屋: 21%	トタン:50% その他: 50%	漆喰:59% 板張り: 12%	1階>2階型: 51% 箱型:41%
VI	タイプ6	切妻:99%	その他: 99%	漆喰:38% 板張り: 18%	箱型:90%

クラスター **No.1** においては屋根材の 카테고리『その他』をさらに細かく分類し『トタン+瓦』の混合タイプをタイプ **4** とし、『ルーフィングやスレート』といった新建材を扱っているものをタイプ **6** とした。

### 5.3 建物タイプ分類のまとめ

6 つの建物タイプに分類したところで改めてその割合をみると、表 **3** にもあるように、建物タイプで最も多いのが現代的適応型（仮）であり、続いて伝統的旧来型（仮）である。現代的で比較的最近立地していると思われる現代的な大衆型（仮）においても徐々に占める割合も大きくなってきているものと考えられる。そこで分類した建物タイプが地域内にどのように分布して、10 年前、20 年前と比較してその立地に傾向はあるのかどうかを整理した。

図 **7** に示されるように、従来の伝統的な建物系統（タイプ **1**～タイプ **4**）が徐々に減少傾向にあるなかで、タイプ **5**、タイプ **6** といった屋根材が瓦以外、外観の形状も箱型といった建物の建設が目立ってきていることがわかる。

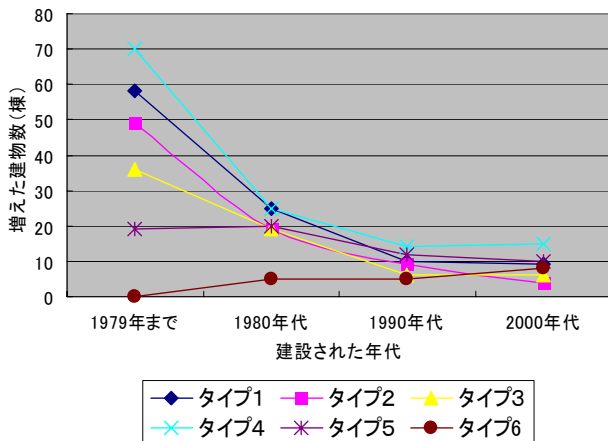


図 7 タイプ別にみた建設年代ごとの増加数

## 6. 小野地区の通り景

### 6.1 通り景調査の意義と概要

これまでの調査から現地調査による建物の実態把握と地形図による傾斜状況把握による地域の特徴を明らかにしてきたが、対象地区の街並みの現状を把握するには地形と建物の間にある「通り」の特徴も明らかにする必要がある。

研究対象地の小野地区は前述したようにかつての田園地帯を区画整理事業によって通りを整備し宅地化を行ってきた地区である。そのため、現在の小野地区の通りを歩いてみると、田畑が今も残っている

場所と新たに開拓され宅地になった場所や駐車場にとって変わった場所とが混在している状況である。伝統的な建築物が密接に建ち並び、連続性のあるファサードを展開している中心部の街並みとは歴史的な背景による成り立ちという観点からも異なるといえる。そこで本調査では通りの写真撮影を行い、得られた写真からその通り景の特徴を抽出し、第 5 章までに得られた結果を用いてその関係性を示す。

### 6.2 対象となる通りの選定基準と類型化

地域内の通りのうち、普段の生活に密接に関わってくる通りを選定対象とした。ゆえに移動や散歩に頻繁に使用される通りを対象とし、条件として以下のいずれかの項目に当てはまるものを調査対象の通りとした。(図 **8** 参照)

- ① 2 丁目以上の地区にまたがっているもの
- ② 1 丁目内のみの通りでも①の通りと少なくとも 2 回以上交差・接続するもの

これらの選定基準によって調査対象とした通りは全部で 13 本あった。その概要を下の表と図にまとめた。

No.	区間	線形	通り延長	幅員
①	小野 1 丁目～ 4 丁目	2 回折れ曲がり勾配なし	約 1012m	約 4m
②	小野 2 丁目～ 8 丁目	2 回折れ曲がり勾配緩	約 1010m	約 4m
③	小野 2 丁目～ 6 丁目	1 回折れ曲がり勾配なし	約 484m	約 4m
④	小野 6 丁目～ 8 丁目	直線勾配なし	約 577m	約 4m
⑤	小野 2 丁目～ 6 丁目	一部曲線勾配緩	約 723m	約 4m
⑥	小野 3 丁目～ 5 丁目	多数折れ曲がり勾配なし幅員小	約 441m	約 2m
⑦	小野 3 丁目～ 5 丁目	多数折れ曲がり勾配緩	約 503m	約 4m
⑧	小野 5 丁目～ 7 丁目	多数折れ曲がり勾配緩	約 292m	約 4m
⑨	小野 6 丁目～ 8 丁目	直線勾配急幅員大	約 386m	約 6m
⑩	小野 7 丁目～ 8 丁目	一部曲線勾配急	約 418m	約 4m
⑪	小野 4 丁目～ 6 丁目	直線勾配緩	約 292m	約 4m
⑫	小野 3 丁目～ 4 丁目	直線勾配ほぼなし	約 270m	約 4m
⑬	小野 1 丁目～ 8 丁目	勾配緩一部急幅員大	約 1372m	約 8m

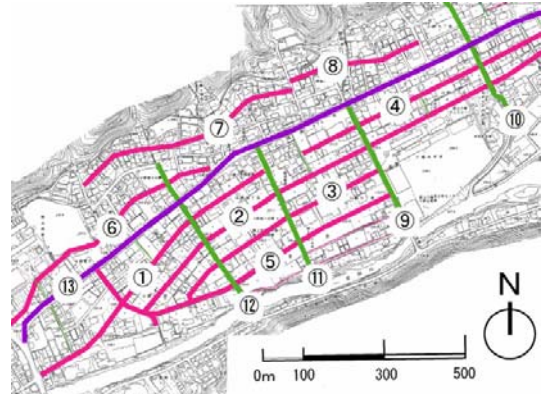


図 8 調査対象とする通りとその名称

それぞれの通りについて通りの端から約 100m ごとに写真撮影を行い、その写真から得られた情報を整理し、それを裏付けるデータを示す。

### 1) 線形とアイストップ

国道 472 号線（通り No. ⑬）に沿った方向軸を東西軸とし、それに直行する方向軸を南北軸とすると、東西軸に関しては通り No. ①・②・③・④・⑤・⑬は直線の線形のものがほとんどであり、撮影地点からは常に通りの始点あるいは終点が望めるものがほとんどでアイストップには八幡城や遥か先にある山々であった。それに対して斜面地側における通り No. ⑥・⑦・⑧は勾配の変化に富み折れ曲がりも多く幅員も小さいため撮影地点におけるアイストップには盛土で形成された擁壁や塀、あるいは建物外壁が多い。南北軸に関してはいずれも直線の線形の通りであり、視線の先には間近な山並みがある。南北の通りの景によって山がすぐ近くまで迫ってきているような感覚を抱き、沿道にある建物による近景の囲われ感とはまた異なった体験を得る。



図 9 直線（左）と折れ曲がり（右）のある通り

### 2) 交差点における建物の立地密度

小野地域はこれまで何度も述べてきたように、かつての田園地帯を開発して宅地化を進めてきたので地域を見渡すと宅地化が進んでいる立地密度の大きいエリアと周囲にまだ田畑が残っている中で 1・2 棟立地しているような立地密度の小さいエリアとがある。通り 1 つをとっても撮影地点によって様々な立地密度となっていることがわかる。そこで交差点における建物の立地密度に注目してみると、4 つ角あるいは T 字路といったところにおいて全ての角地に建物が立地している割合が大きい通りは No. ①・⑥・⑦・⑧・⑬である。No. ⑥～⑧の沿道エリアは区画整理事業以前から集落があった地域であり、比較的他の通りよりも成熟している印象をうける。所々に建物が建て変わっているため色合いに統一感などは感じられない。その他の通りにおける交差点の建物立地密度はいずれも小さく、田畑や駐車場・空き地に使用されており開放的な広がりのある空間となっている。



図 10 交差点による建物の立地密度

### 3) 水路のない通り景

小野地域内にはかつては農業用水路が地域内を縦横無尽に走っており重要な役割を果たしていた。またそれらは通りに沿って存在していた。しかし現在は田畑面積の減少や上下水道施設の整備によって水路が暗渠化している。写真撮影による通りの景にも水路がオープンであるものはほとんど見受けられない。中心部では水路のある通りの景が重宝されているのに対し、隣接している地域の実態としては車などの移動における機能性の向上が優先されていると



図 11 盛土によるファサード

ということが窺える。

### 4) 盛土によるファサード

小野地域は河岸段丘上に形成された集落であるため、建物は等高線に沿って立地していることはすでに述べたが、通りの景においても地形的な影響が強く表れている。東西軸においては盛土がそのまま建物 1 階部分の駐車場として使われているエリアもあり、そのようなエリアでは擁壁と車庫が通りに面した顔となっている。そのような通りが形成されているものは主に No. ⑦・⑧である。また、南北軸においては各建物が個々の塀を設けていてその塀が勾配の緩急を示しており通りに連続性を持たせているといえる。

## 6.3 通り景の調査指標

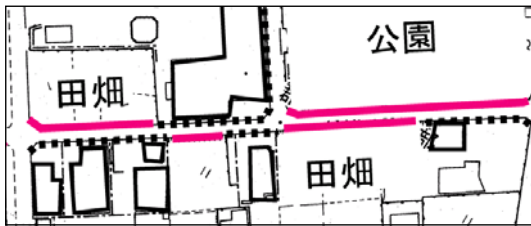
### 6.3.1 宅地接地率

通り景の特徴を示すためには沿道に接する土地形態を把握することが必要であると考え、その指標の一つとして通りに接する土地の利用用途に注目した。



通りの総延長から田畑や公園、駐車場など宅地以外の土地利用状況の総延長を引いたものを宅地接地長さと定義し、それらを通りの総延長で除したものに 100 を乗じたものを宅地接地率と定義した。

宅地接地率が大きい値を示すものほど、沿道に宅地となる建物の存在の多さを表しており小さい値のものほどその通りは田畑や公園、駐車場といったオープンスペースを沿道に有するということが言える。



<p>[宅地接地長さ]</p> <p>= [通りの総延長] - [沿道に接する田畑や公園などの総延長]</p>
<p>[宅地接地率]</p> <p>= ([宅地接地長さ] ÷ [通りの総延長]) × 100</p>

### 6.3.2 その他の調査指標

その他の通り景の物理的特性としては、総幅員・見通し距離・D/H・他の通りとの接続・折れ曲がり回数を選定し、また、見通し距離における田畑の接地距離の割合も把握した(表 3 参照)。見通し距離は通りの端から通り軸方向に見通せる距離とし、総幅員とともに 1/2500 の地形図上で測定した。

表 3 通りの物理的特性カテゴリー

指標値	総延長	幅員	見通し距離	D/H	折れ曲がり回数	宅地接地率	接続
0					0回	0%	0ノード
1	250m未満	3m未満	12m未満	1未満	1回	25%未満	1~3ノード
2	500m未満	5m未満	24m未満	1以上1.5未満	2回	50%未満	4~6ノード
3	750m未満	8m未満	135m未満	1.5以上	3回	75%未満	7~9ノード
4	1.0km未満	10m未満	135m以上		4回	100%未満	10~12ノード
5	1.25km未満	10m以上			5回以上	100%	13ノード以上
6	1.25km以上						

## 6.4 調査結果

表 各通り別の物理的特徴

	総延長	幅員	見通し距離(通りの本数)				D/H	折れ曲がり回数	宅地接地率		接続
			1	2	3	4					
A通り	5	2	0	0	0	4	2	2	4	4	3(7ノード)
B通り	5	2	0	0	1	3	2	3	3	3	4(10)
C通り	2	2	0	0	1	2	2	3	3	3	2(5)
D通り	3	2	0	0	0	1	3	0	4	3	2(6)
E通り	3	2	0	0	2	3	1	4	3	2	3(9)
F通り	2	1	0	3	6	0	3	5	3	4	3(7)
G通り	3	2	0	0	4	1	2	4	3	4	2(5)
H通り	2	2	0	0	3	0	2	2	4	4	3(9)
A通り	2	3	0	0	0	1	1	0	4	4	3(8)
I通り	2	2	0	0	3	1	2	4	3	3	3(8)
U通り	2	2	0	0	0	1	2	0	3	3	3(7)
E通り	2	2	0	0	0	1	2	1	3	3	2(6)
R472	6	4	0	0	1	2	1	2	4	3	5(18)

### 6.4.1 調査結果

### 6.4.2 通り調査のまとめ

## 7. 得られた知見と今後の課題

今回の調査では数多くの建物を幾つかのタイプに分類し整理した。

本研究では建物の外観に用いられている多様な構成要素を基本的構成要素と付随的構成要素に分類し、それらの特徴や傾向から地域に立地している建物の特徴を明らかにしていった。本研究における対象地は 30 年前に行われた土地区画整理事業によって造成された居住地区における宅地化の変遷に伴った建物に着目した。石垣や植栽が立派に配置され、落ち着いた景観を演出している建物や通りは存在するがすべてがそうではない。中心市街地のように統一さ

れた街並みとは異なる性格を帯びた周縁部の建物に対し、今回の調査はあくまでも実態を把握し、地域の理解を深めるための始めの一歩であった。一見ばらばらで統一感のないような建物でも細かい建築要素を組み合わせたり、要素の一部分を交換したりすることを考えてみるだけでこの地区に相応しい街並みの将来像がひらけてくる期待も出てくるといえる。建物のデザインには住人の意思が少なからず存在していることが建物の建替え確認のために行ったヒアリング調査を通じて窺えた部分もあったので、今後の展開としては建物の外観にのみならず、住民の意思に耳を傾けていくことが必要である。建物の外観には個人の意思を地域の意志として連結していきながら小野地域の方向性を定めてにおけるまちづくりのありかたを今後も展開していく必要がある。

## 参考文献

- 1) 吉田友彦、小山雄資、長谷川洋（2007）、「郊外戸建て住宅地における新規転入層の特徴―千葉県木更津市を事例として―」
- 2) 溝渕浩平、大山勲、吉川仁（2007）、「町並み景観保全のための住宅建築様式の現状把握とその評価に関する研究―山梨県市川三郷町市川地区中央部の住まいのガイドラインづくりに向けて―」、日本都市計画学会都市計画論文集 No42-3 、P91-96
- 3) 八幡町住宅地図（1979年、1985年、1987年、1990年、1994年、1998年、2000年、2004年）：岐阜県立図書館所蔵
- 4) 郡上市『水辺空間調査報告書』（2005年）
- 5) 常滑市：やきもの散歩道地区景観構成要素調査事業報告書（2003年）
- 6) 八幡町：八幡町のまちなみづくり（2000年）
- 7) LANDSCAPE DESIGN No.551
- 8) 沖野俊介 2006年度早稲田大学卒業論文
- 9) 岐阜県郡上郡八幡町小野土地区画整理組合：土地区画整理沿革史、『小野地名誌考』村井武夫